

## 自己開示経験によるライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計とその学修成果の検証

著者	奈良 隆章
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第4号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00161044">http://hdl.handle.net/2241/00161044</a>

氏 名	奈良 隆章			
学 位 の 種 類	博士（体育スポーツ学）			
学 位 記 番 号	筑鹿博甲第 4 号			
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学 位 論 文 題 目	自己開示経験によるライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計とその学修成果の検証			
主 査	筑波大学教授	教育学博士	鍋倉 賢治	
副 査	筑波大学教授		坂本 昭裕	
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	木内 敦詞	
副 査	鹿屋体育大学教授	博士（体育学）	高橋 仁大	
副 査	明星大学准教授	博士（学術）	島本 好平	

## 論文の内容の要旨

奈良隆章氏の博士学位論文は、自己開示経験によるライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計とその学修成果の検証に関する研究である。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章の序論では、まず、本研究の背景となる高等教育の動向や体育・スポーツとライフスキルの関係に関する先行研究を概観し、残された課題と本研究の独自性について述べている。その上で本研究の目的を、「ライフスキル獲得への正の影響性の示唆される自己開示経験に着目した大学体育授業を設計し、その実践を通じた学修成果を検証すること」としている。その課題解決のために、課題 1「学修者および現行の大学体育授業に関する情報獲得」、課題 2「ライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計」、課題 3「設計した授業の実施および学修成果の検討」を設定している。

第 2 章では、課題 1「学修者および大学体育授業に関する情報獲得」の 1 つ目の課題として、ライフスキル水準にみられる性別および専攻別の特徴分析を行っている。その結果、1) 特に親和性と感受性をはじめとした対人スキルは男子よりも女子が有意に高いこと、2) 社会国際系学生のライフスキル獲得水準は高く、情報系のそれは低く、その差異は有意であることが明らかになったとしている。このことから、集団スポーツを扱う体育授業のグループ編成においては、性別や専攻に偏りのない集団となるよう、教員が配慮する必要性を指摘している。

第 3 章では、課題 1「学修者および大学体育授業に関する情報獲得」の 2 つ目の課題として、当該大学における体育授業に対する学修者の肯定的認知度の分析を、テキストマイニングに基づいて行っている。その結果、個人種目を扱う授業では「健康・体力およびスポーツ技術に関する基礎的知識や思考力・実践力の養成」が、集団種目では「豊かな心と社会性の醸成」が、それぞれ学修者の肯定的な認知度の高いことが明らかになったとしている。このことから、体育授業で扱うスポーツ

種目のうち、個人種目と集団種目ではそれぞれ、高い成果をあげる学修内容に相違のあることを指摘している。

第4章では、課題2「ライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計」を行っている。具体的には、ライフスキル獲得に寄与することの示唆されている、スポーツ活動に内在する4つの経験（自己開示、他者協力、挑戦達成、楽しさ実感：島本・石井、2007）に着目し、その中でも影響力の高いことの示唆される「自己開示」に焦点を絞り、自己開示を豊富に経験することを意図した体育授業の設計およびそのプロセスを提示している。従前の授業の改善点を、1)到達目標、2)実施内容、3)成績評価法、に分けて整理するとともに、スポーツ教育学、スポーツ心理学、教育工学における先行研究で得られている知見を動員し、自己開示経験によるライフスキル獲得を意図した大学体育授業を設計している。

第5章では、第4章で設計した体育授業を実施し、その学修成果の検証を試みている。具体的には、自己開示経験の増加を意図した新授業プログラムを通して、受講生にどのような経験をさせることができ、なおかつ、ライフスキルにどのような変化をもたらしたかを検討することで、プログラムの評価を行っている。その結果、1)新授業受講者は旧授業受講者よりも、授業での自己開示経験が有意に増加したこと。2)新授業において自己開示を多く経験した受講生では、受講前のライフスキル水準や過去の運動経験に関係なく、受講前後でライフスキル水準が有意に高まったこと。3)新授業は健康・体力や技術習得などの側面においても効果を見込める内容であったこと。4)自己開示を妨げる不安には、当該種目の技能的なものと対人場面に関するものが多く、それは学期の序盤に集中していたこと。以上のことが明らかとなったとしている。

第6章の総括では、本研究の結論を述べるとともに、本研究の限界と大学体育授業研究に関する今後の課題について述べている。

巻末資料には、Learning Management System (manaba) において新授業受講学生が入力した自己開示経験に関する記述がそのまま掲載されており、新授業に対する学生の声を閲覧できるようになっている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本学位論文は、ライフスキル獲得への正の影響性の示唆される自己開示経験に着目した大学体育授業を設計し、その実践を通じた学修成果を検証したものである。体育・スポーツとライフスキルに関する先行研究では、スポーツ活動に内在する自己開示経験が重要な役割を果たすことが示唆されているものの、豊かな自己開示経験を通じたライフスキル教育を大学体育授業で実践した報告はなく、その有効性を検証する研究も行われてこなかった。この課題解決へ向けて本研究は、豊かな自己開示経験をもたらす大学体育授業プログラムを具体的に提示するとともに、多くの自己開示経験のできた学修者におけるライフスキル獲得水準の向上を明らかにしている。本研究は、今日の大学における体育授業の1つの方向性を示唆する実践的な研究として高く評価でき、今後長く多くの大学体育関係者に引用されていくと考えられる。

令和2年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（体育スポーツ学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。